

「映画のこと」

往年の映画スターを随分とたくさん切り絵にしてきた。まずはネットから気になるスターのグラビアやスチール写真（映画のワンシーン）を探す。次にそれを切り絵用にくっつかのレンドリングソフトで加工する。モノクロにするかカラーにするかを決めてから紙を選ぶ。映画スターなら誰でも良いというわけではない。やはり誰もが知っていて、美しさや華がある人が好ましい。

僕の映画歴はとても長い。学生時代はよくロードショーや名画座に足を運んだ。社会人になってからは劇場に行く余裕もなくなったが、ある頃（1980年代の半ばくらい）から街のあちらこちらにビデオショップなるものが出現し、自宅に居ながらにして好きな映画が鑑賞できるようになり、僕は若き日の映画館通いを思い出しながらせっせとショップに通い始めた。

ショップで最初に借りたのは、ビリー・ワイルダーの「悲愁」(79/米)だったと思う。それをきっかけに往年の名画にハマった。フランク・キャブラ、ヒッチコック、ウィリアム・ワイラー、ジョン・フォード、ハワード・ホークス、ルキノ・ヴィスコンティ、ロベルト・ロッセリーニ、ビットリオ・デ・シーカ、キャロル・リード、溝口、小津、黒澤。それら名監督たちによる上質で美しい映画の数々に夢中になった。

まもなくして、マイコンなるものが出現した。いまのパソコンの走りである。簡単なデータベースソフトが付属していて、僕はそれにそれまで観た映画を記録し始めた。製作年、評価、観た場所、ビデオorフィルム、監督、出演者だけの簡単な記録だが、それは現在まで続いている。例えば、いままで観た映画で評価☆☆☆☆で検索すると、全3587本中120本が一瞬でリストアップされるという具合だ。観終わった後に記録するのは面倒だが、そのデータは何かと便利で、僕の大切な宝になっている。

やがて1990年頃から、都心部を中心にいわゆるミニシアターなるものが出現し始めた。そこでは“単館上映”と称して、主にインディーズ系の珠玉の小品が次々と上映されていた。映画の質もさることながら、その瀟洒な空間に僕はたちまち魅了された。

「エル・スール」83スペイン/仏

「カオス・シチリア物語」84/伊

「パリ・テキサス」84独/仏

「マイライフ・アズ・ア・ドッグ」85/スウェーデン

「友だちのうちはどこ？」87/イラン

「恋恋風塵」87/台湾

「ペレ」88/デンマーク

「存在の耐えられない軽さ」88/米

「読書する女」88/仏

「セックスと嘘とビデオテープ」89 米

「バグダッド・カフェ」89/西独

「仕立て屋の恋」89 /仏

「ウルガ」91/仏

「美しき諍い女」91/仏

そして、40週連続上映の記録をつくった「ニュー・シネマ・パラダイス」89/伊・仏。

これらすべてをミニシアター（主に日比谷シャンテとシネスイッチ銀座）で観たと思う。いずれ劣らぬ心躍る作品群である。その後、

「マッチ工場の少女」90/フィンランド

「さらば、わが愛 霸王別姫」93/中国

「ピアノ・レッスン」93/オーストラリア

「レオン」94/米

「死と処女」95 /米

「イル・ポスティエーノ」95/伊

「秘密と嘘」96/米

「ユージュアル・サスペクツ」95/米

「バウンド」96/米

「運動靴と赤い金魚」97/イラン

「セントラル・ステーション」98/ブラジル

「あの子を探して」99/中国

「リトル・ダンサー」2000/英

と、単館上映名作群は続いていく。これらに共通するのは、やや小粒ながらもしっかりと映画の香りを漂わせていることだ。その馥郁たる香りが、映画を観たときの劇場の雰囲気すらもありありと思い起こさせる。パンフレットも味わい深く、特にシャンテシネ物は映画の全セリフが掲載されている。

映画館の静謐な暗闇から、一転ざわついた街の喧騒に踏み出したとき、ふと我に返り、たった数分前までの銀幕の中の別の人生が、いまここに在る自分の人生と重なって、心地よい余韻を醸し出す。そんな一瞬の幸福のために生きているような気さえしてくる。よく笑ったし、それ以上によく涙を流した。これまでそしてこれからも、映画なくして僕の人生はない。

さて、前ページの「街の灯」（31/米）は、偶然にも妻と息子の両方が生涯のベスト1に選んだ作品である。僕のベスト1は？と問われれば、もはや途方にくれるしかないが、確かに「街の灯」には映画のすべてが詰まっていて、これを1位にしないとキネマの神様から叱られそうな気がする。映画が発明されてわずか30数年であのような傑作が生まれたのはまさに“奇跡”としか言いようがない。